『偸盗』（芥川龍之介）小考

吉田俊彦

はじめに

《彼は鋭い頭脳の為に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の為に天上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」、「竹の木戸」等の短編を生じ、後者は「非凡なる凡人」、「少年の悲哀」、「画の悲しみ」等の短編を生じた。自然主義者も人道主義者も独歩を愛したのは偶然ではない。》（文芸的な、余りに文芸的な、二十八）

これは、国木田独歩の作家的特徴を論じた文章の一節であるが、この分析過程には、独歩と同質の資性を背負った芥川自身の自己確認が微妙に重なり合っていると見てよかろう。それだけに、「鋭い頭脳」と「柔かい心臓」という融和しがたい対極的資質の矛盾葛藤は、具体的な日常的生活次元においても、当然見られるのであり、家族の反対を受けて、吉田弥生への求婚を断念しなければならなかった際の傷痕には、この対極的資質の矛盾葛藤によって生じる分裂的危機が暗い影を落している。

《彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。》（或阿呆の一生、三十五、傍点引用者）

「いつ死んでも悔いない」ような「烈しい生活」を決意しながらも、養父母や伯母への「遠慮」という「柔かい心臓」の作用によって、それを果たすことのできなかった芥川は、「柔かい心臓」に支えられた平穏な日常性の裏手で、「鋭い頭脳」を働かせながら、「如何に血族の関族が稀薄なものであるか、如何にエゴイズムを離れた愛が存在しないか　如何に相互の理解が不可能であるか　如何にへ真〉を見る事の苦しいか　さうして又如何にへ真〉を他人に見せしめんとする事が悲劇を齎すか」（大正4・4・23、山本喜誉司宛書簡）という醜悪なエゴイズムと悲惨な人間存在の確認を重ねなければならなかったのである。この醜悪なエゴイズムと悲惨な人間存在の認識をモチーフに形象化した『羅生門』の世界において、倫理終焉の果ての暗黒世界と人間内部に潜む不可思議な生命体とを凝視した芥川が、やがて、「『羅生門』をとりまく『darkness』の中に『something』を見出」そうとして、『偸盗』世界の形象に着手したことは、海老井英次氏の指摘[注③]にも見られるように、創作メモなどから推して、十分想定し得ることであるが、この「something」の探索過程においても、「鋭い頭脳」と「柔かい心臓」との角逐は、劇的緊張要素として深く関わっていたものと考えられる。[注①][注②]

この小論では、まず第一に、太郎と次郎との人物造形に、夏目漱石の『行人』の世界を超えようとする芥川の認識志向を読みとり、次いで第二に、阿濃の認識機能に、『行人』の挿話の影響と芥川固有の認識的特徴を探り、そして最後に、『行人』の重層的な認識帰結とは異なる『偸盗』の閉塞的な限界性とその背景を尋ねてみたい。

一　太郎及び次郎の造形と『行人』

『行人』の強い影響が明確に認められる最初の作品は、大正五年四月、第四次「新思潮」に発表された『孤独地獄』[注④]である。この作品に見られる『行人』の具体的な影響面については、すでに触れたことがあるので、詳述は避けるが、『孤独地獄』の禅超の存在不安とその不安を解明する津藤の認識経路には、『行人』の一郎とHさんの形象的特徴が重なり合っており、『孤独地獄』の認識的核となる禅超の孤独地獄の苦艱は、『行人』の認識要素にそのまま依拠したものと言うことができる。もっとも、両作の間に様々な差異の存することは言うまでもないが、認識的特徴に関わる大きな差異は、『行人』の漱石が、存在不安に怯える一郎の苦悩を、妖しい性の力と前近代的な家族秩序と鋭利な内省的力との錯綜する構造的力学として捉えているのに対し、『孤独地獄』の芥川は、禅超の苦悩

の構造的背景に、検索の眼を向けてはいないことである。

ところで、『偸盗』の、沙金を狭む太郎と次郎との恋の暗闘には、『行人』の、直を中にして起す一郎と二郎の心理葛藤が意外に強い影響を及ぼしているものと考えられるが、ここでまず、沙金と直という女主人公を中にして、愛の角逐をつづける兄弟の特徴に注目してみたい。

《――自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見ても羨ましい。自分は何うあつても女の霊といふか魂といふか、所謂スピリットを攫まなければ満足が出来ない。それだから何うしても自分には恋愛事件が起らない》（兄、二十）

妻、直の心を攫みかねて、痛ましい存在不安に陥る『行人』の一郎は、右のようなメレディスの書簡内容を踏まえながら、その苦衷を弟、二郎に、「霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥だ」（同）と語っているが、この女のスピリットを攫もうとする一郎の痛切な願いは、『偸盗』においては、太郎の思いとして次のように生かされている。

《顔貌は、七八年前の痘瘡が、己には重く、弟には軽かつたので、次郎は、生れついた眉目をその儘に、うつくしい男になつたが、己はその隻眼つぶれた、生まれもつかない不具になつた。その醜い、隻眼の己が、今まで沙金の心を捕へてゐたとすれば、（これも、己のうぬ惚れだらうか。）それは己の魂の力に相違ない。》（三、傍点引用者）

ここに見出される共通的要素は、愛の対象となる美を肉の美と魂の美に二元化し、そして、魂の美を重視する考え方である。

妻、直の「スピリット」を攫み得ていない不安に怯えつづける『行人』の一郎は、ダンテの『神曲』に描かれているパオロとフランチェスカとの愛を踏まえて、「人間の作った」（帰ってから、二十七）人為的力と「自然が醸した」（同）自然的力とを対照化し、そして、自然的力を支えとした恋愛を「神聖」（同）視しながら、二郎に「永久の勝利者」（同、二十八）を見定めている。直の心を自然的力によって惹きつけていると一郎が判断している二郎の美質は、当然、一郎の持ち合せていないものでなければならない。一郎の特徴が「学者で」「見識家家で」「其上詩人らしい純粋な気質を持つて生れた好い男」（兄、六）ではあるが、「長男丈に何処か我儘な所を具へ」「機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を利かず」（同）、それでいて、「他人の前へ出ると、また全く人間が変つた様に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない」（同）というものであるのに対し、二郎は、どこまでも、「世渡り」の「旨い」（帰ってから、二十二）人間である。一郎にとっては、「士人の交はりは出来ない」「軽薄児」（同）に過ぎない人間であるが、一般的には、明朗円満な常識人と規定することができよう。

『偸盗』の芥川は、『行人』における二郎の、明朗円満に身を処していくことのできる常識人的美質を、「生れついた眉目をその儘に」（三）保ち「誰の目にも」（同）太郎よりは「うつくし」（同）く見える外貌的特徴に定着させている。そして、「世渡りの旨さ」（帰ってから、二十二）を持つ二郎を「士人の交はりは出来ない男」（同）と非難する一郎の、高い「学者」（同）的見識とか純粋な「詩人」（同）的気質、あるいは、気むらな「長男」（同）的我儘などの特徴は、二郎の場合と同様に、「痘瘡」（三）が「重く」「その為に隻眼つぶれた、生まれもつかない不具」（同）という外貌的特徴に置き換えている。

このように、『偸盗』における芥川は、学者的見識、詩人的気質、長男的我儘、そして、世渡り上手といった内的、性格的特徴に重きを置いて一郎、二郎の造形を図る『行人』の漱石とは異なり、容貌の美醜という外的、身体的特徴によって、太郎、次郎の人物的特徴を具象化しているが、この形象的特徴は、一郎の人物造形に働いている、家父長的秩序とか外発的開化の病弊などという文明論的視角を閉ざすのであり、太郎と次郎との暗い内的葛藤は、人間の生を取り巻く政治的、社会的、歴史的な構造的背景を照らし出すこともないままに、ただ、性の力に翻弄される情念と骨肉の愛に拘束される心情との葛藤劇へと収斂していくのである。[注⑤]

次いで、女主人公に注目してみると、ここにも、芥川固有の特性が明瞭に捉えられる。[注⑥]『行人』の女主人公、直の本質的な特徴の輪郭は、二郎に「凡ての女は、男から観察しようとすると、みんな正体の知れない嫂の如きものに帰着するのではあるまいか」（兄、三十九）という思いを抱かせるように、謎に満ちた女である。彼女の外貌は、「濃い眉」（塵労、五）と「濃い眸」（同）と「蒼白い額や頬」（同）、そして、その「淋しい色沢の頬」（兄、六）の「真中」（同）にあ

る「淋しい片鬣」（同）などによって捉えられているが、この蒼白い淋しい色沢の頬と濃い眉と濃い眸は、謎に満ちた彼女の魅惑の基底に、清澄な光を添えるものと言ってよかろう。しかし、直の覗かせる「嬌態とも見える」「不自然」（兄、三十一）な態度とか「腑抜な」（同）自分への責めと諦めとを涙で語りながらも、過去に与えた親切を二郎に想起させる、さりげなく巧みな言辞（同、三十二）、また、募る嵐のために突如明りの消える暗闇の中で、「何時の間にか薄く化粧を施した」「艶かしい事実」（同、三十六）などは、「夜」という闇の力によって妖しげな光を放つものであり、正体不明の謎は、直の本質的特徴と考えられる。この謎に満ちた『行人』の女主人公、直の人物的特徴に対し、『偸盗』の女主人公、沙金の人物的特徴は、蠱惑的な妖艶さを武器に生きる魔性的性格づけが明瞭になされている。[注7]

《中肉の、二十五六の女である。顔は、恐しい野性と異常な美しさとが、一つになつたとでも云ふのであらう。狭い額とゆたかな頬と、鮮な歯と淫な唇と、鋭い眼と鷹揚な眉と、――すべて、一つになり得さうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪ばかりの無理もない。が、中でも見事なのは、肩にかけた髪で、これは、日の光の加減によると、黒い上につやゝかな青みが浮く。さながら、烏の羽根と違ひがない。次郎は、何時見ても変らない女のなまめかしさを、寧、憎いやうに感じたのである。》（四）

「一つになり得さうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪ばかりの無理もな」く作り上げられている沙金の魅力的な特徴描写は、これまでの劇過程の中で点描されてきた「義父との淫な関係」（一）とか多くの男の「身を亡ぼ」（三）させる「淫な媚び」（同）、あるいは「日頃は容色を売つて、傀儡同様な暮しをしてゐる」「盗人の頭」（同）などと呼応し、蠱惑的な妖艶さを鮮明に浮びあがらせており、ここには、『行人』の直のような正体の知れない謎の奥行きを見出すことはできない。読者の関心は、自ら、沙金の蠱惑性に操られる太郎、次郎の兄弟愛がどうなっていくかということに向けられるが、ここで、沙金を争う太郎と次郎との角逐劇と密接に連鎖している挿話的な阿濃の物語に注目してみたい。

二　阿濃の認識機能と『行人』の挿話

『偸盗』における挿話的な阿濃の愛の物語には、重要な認識機能が託されていると考えられるが、阿濃の紹介は、他の登場人物と同様に、その本質的な特徴が、第一章において印象的に点描されている。

《あの阿呆をね。誰がまあ手をつけたんだか――尤も、阿濃は次郎さんに、執心だつたが、まさかあの人でもなからうよ。》

「阿呆」と蔑視されている阿濃は、「白痴に近い天性を持つて生まれた」（七）哀れな女であるが、それだけに、優しく接してくれる次郎に対しては、純粋な愛を一途に抱きつづけ、猪態の爺の無理強いによって懐妊した胎児をも、「次郎の子だと」「緊く心の中で信じ」（七）、そして、胎児の身動きが「容易に止まない」（同）時などは、「次郎が好んでうたう小唄」（同）を「うろ覚えに覚えた」（同）唄声で歌うのである。この阿濃の次郎に寄せる純一な愛は、『行人』において、三沢に見せる精神病の娘さんの愛に重なり合うものである。

《其娘さんは蒼い色の美人だつた。さうして黒い眉毛と黒い大きな眸を有つてゐた。其黒い眸は始終遠くの方の夢を眺てゐるやうに恍惚と潤つて、其処に何だか便のなささうな憐を漂よはせてゐた。僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄関に膝を突いたなり恰も自分の孤独を訴へるように、其の黒い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして活きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。》（友達、三十三）

ところで、阿濃と精神病の娘さんの作中における認識的役割は、共通する対応要素を見せながらも、その基底に働く作者の認識的志向には、大きな相違が認められる。まず、精神病の娘さんについて見ると、彼女は、はじめ二郎にとって、単なる「色情狂」（同）にしか過ぎない女であったが、三沢が、「あの女」に惹かれていた自分の浪漫的な心底の秘密を語りながら、ふと浮べた「一種の微笑」（同）は、二郎の胸中に印象をとどめていた色情狂としての精神病の娘さんを、哀しくも美しい悲劇的な女性へと変容していくのである。やがて、兄の章で、精神病の娘さんが二郎の想念に思い浮んでくるのは、二郎が、佐野と貞との結婚に

いろいろと心を配る周囲の好意を前にして、「有難いと思ふか、余計な御世話だと思ふか」（兄、四）を貞に尋ねてみたくなる時であるが、この連想を描く漱石にとって、精神病の娘さんは自立的[注⑧]な愛とは無縁な前近代的な結婚の生み出す悲劇の象徴に外ならない。

これに対し、『偸盗』の阿濃は、すでに見てきたように、最初、猪熊の婆の言葉によって、不幸な天性を読者の心に残し、やがて、五章に至り、堕胎薬を無理強いする猪熊の爺に激しく抵抗する姿として、再び登場してくるのである。この時点の「とられた髪も、ぬける程強く、頭を振つて、一滴もそれを飲むまいとする」（五）阿濃のすさまじい抵抗の姿には、白痴に近い不幸な天性を持って生れながらも、胎内に宿る己れの分身に限りない[注③]愛を寄せる母の命が息づいており、これは、様々な醜い確執を照らし出す、純一無償の母性愛を原型的に示すものと言えよう。

「腹の児の親さへ知らない」（七）阿濃の白痴に近い不幸な宿命といじらしい心情が、読者の心に具象的なイメージを結びながらも生動しはじめる時、同じ章中で、太郎に向って開陳する猪熊の爺の人倫の条理は、醜悪な我執とあざとい人知によって構築された欺瞞性を暴露しながら、小気味よく崩壊していくのであり、阿濃の純一無償の愛と猪熊の爺の醜悪な我執との形象モチーフには、人間のエゴイズムを深く認識しなければならなかった不幸な愛の原体験が密接に関わっていると見ることができる。

芥川は、太郎が猪熊の爺を「膝の下に」「押し伏せた」（五）時、猪熊の爺に「親殺しぢや」という言葉を叫ばせているが、この言葉は、その後七回、そして、親の存在主張を示す「親」という語を六回用いさせている。この語を多用する猪熊の爺の心底には、太郎の太刀を逃れ、ただ助かりたい一念のみが強く働いていたことは言うまでもない。

≪「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思ふか。いやさ、親と思ふ事が出来るかよ。」／「きくまでもないわ。」／「出来まいな。」／「おお、出来ない。」／「それが手前勝手ぢや。よいか。沙金はお婆のつれ子ぢやよ。が、わしの子ではない。されば、お婆につれそふわしが、沙金を子ぢやと思はねばならぬなら、沙金につれそふおぬしも、わしを親ぢやと思はねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思はぬ。（略）親を殺さうとするおぬしも、畜生ではないか。」≫（五、傍点引用者）

猪熊の爺が、「このわしを、親と思ふか」という太郎への質問の言葉を「いやさ、親と思ふことが出来るかよ」と言い換え、さらに、太郎の「きくまでもないわ」という返答に、「出来まいな」という首肯的な言を返すところには、自然な親子の愛情を持ち合せない二人の冷たい亀裂の感情を注意深く設定していく芥川の形象意図が現れており、猪熊の爺が、「親」及び「親殺し」という語を多用すればするほど、彼のあざとい知略が幅をきかせることとなるのである。この綿密な形象を果す芥川には、当然、阿濃の純一無垢な母性的愛の対極的世界が明確に[注⑩]見えていたと言ってよかろう。もっとも、ここで見落してならないことは、不幸な愛の原体験を通し、我執に生きる醜悪な人間存在を明晰に認識化していた芥川が、「鋭い頭脳」の鋭鋒を鈍化させ、膝の下に抑え込む猪熊の爺の、「二筋の腱が、赤い鳥肌の皮膚の皺を、そこだけ目だたないやうに、のばしてゐる」（五）老いの「頸」（同）に、「不思議な憐憫」（同）を感じる太郎の心情を設定していることである。この心情設定には、芥川の「鋭い頭脳」を潜り抜けて、無意識に働く「柔かい心臓」[注⑪]の作用を認めることができるのではなかろうか。

このようにして、前近代的な結婚の不幸とか純一無償の母性的愛の原型的特徴を担わされた精神病の娘さんと阿濃の形象イメージは、それぞれの作品の劇軸に微妙な作用を及ぼしながら、発展的な認識を促す重要な機能を果していくのであるが、この認識機能に留意する時、『行人』の「盲目の女」（帰ってから、十五）と羅生門の楼上で「安らかな微笑」を浮べる『偸盗』の阿濃の（七）の設定は、大きな意味を持ちはじめてくるのである。

まず、盲目の女について見ると、彼女は、「黒い眸」（帰ってから、十五）によって、精神病の娘さんと同型にイメージ化された女であり、彼女の形象上及び認識上の役割は、精神病の娘さんの役割の発展的線上に捉えることができる。当然、父が、破約した男の「有体の本当」（同、十八）の心が理解できずに陥った盲目の女の「煩悶」（同、二十一）の様子を語る場面設定は、この発展的線上に位置するものと言うことができる。盲目の女を媒介にして、新たな認識義務を果さなければならない二郎は、父の話を聞き終えて、「神経的に緊張した眼の色」

（同）に変わる一郎と「少し冷笑を洩らしてゐるやうな」「唇」（同）を見せる直との対照性を比較しながら、「兄」の章におけるものとは異なる二人の新たな相貌を見出すと同時に、二人の間の「蟠まりの中に」「引きずり込まれてゐる」（同）自己の存在位置を明確に認識しなければならなかったのである。

「兄」[注12]の章においては、「淋しい色沢」（兄、六）の「淋しい頬に片靨を寄せて」「手水鉢の傍にぼんやり立つてゐ」（同）る直の姿は、どこまでも、「何だか便のなさそうな憐を漂よはせ」「斯うして活きてゐてもたつた一人で淋しくて堪らない」（友達、三十三）と訴える精神病の娘さんの孤独な「嫁」のイメージに重なり合い、そして、「学者で」「見識家で」「其上詩人らしい純粋な気質を持」（兄、六）ちながらも、「長男丈に何処か我儘な所を具へ」（同）ている「六づかしや」（同、九）の一郎は、「新婚早々たび〳〵家を空けたり、夜遅く帰つたりして」「娘さんの心を散々苛め抜いた」（友達、三十三）「旦那」の横暴な家父長のイメージに重なり合うものである。ところが、「有体の本当」（帰ってから、十八）の心が分らない盲目の女の苦しみを、父から聞かされた時点の「少し冷笑を洩らしてゐるやうな」「唇」（同）を見せる直の表情は、家父長的秩序の犠牲を強いられる孤独な「嫁」のものではなく、「死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしない」（兄、三十八）という思いの中で開き直る、不逞な諦念の冷たさであり、これは、男が「結婚破約」（帰ってから、十四）を申し込んだ時の「御免よ」（同）と詫びる「子供らしい言葉」（同）に、「可愛いくも」「馬鹿々々しくも」（同）なりながら見せる、盲目の女の「平気」（同）な余裕の冷やかさに重なり合うものである。そして、「神経的に緊張した」（同、十八）一郎の「目の色」（同）は、横暴な家父長のものではなく、「学問をして、高尚になり、かつ迂闊になり過ぎ」「家中から変人扱ひにされ」「親身の親からさへも、日に日に離れてゆ」（同、二十一）く孤独な人間の疲労した不安の眼の色であり、暗い緊張にたじろぐ姿は、盲目の女が暇をとつた後、「二三ヶ月の間何か考へ込んだなり魂が一つ所にこびり付いた様に動かなかつた」（同、十四）男のイメージに重なり合うものである。

このように、盲目の女の挿話部における二郎の想念には、精神病の娘さんと盲目の女の二つの不幸な愛の物語が連鎖融合し、一郎と直の新たな相貌を浮びあがらせている。この二人の変貌相を浮き彫りしていく形象過程には、多様な側面を併せ持つ不可思議な人間存在の謎を凝視する漱石の、広角的な認識視角と重層的な認識志向が強く働いていると言えよう。

これに対し、『偸盗』の世界で再度姿を見せる阿濃は、別様の認識的役割を果していると言わなければならない。阿濃の再登場する場面は、寺田透氏の指摘[注13]にも見られるように、「濃密で、生の力にゆさぶり上げられるような、歓喜にみちた独白めく抒情文体」によって、鮮明なイメージ定着が図られている。

≪しかしその間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮べながら、羅生門の楼上に佇んで、遠くの月の出を眺めてゐる。東山の上が、うす明く青んだ中に、早に痩せた月は、徐にさみしく、中空に上つて行く。（略）／（略）／窓によりかかつた阿濃は、鼻の穴を大きくして、思入れ凌霄花のにほひを吸ひながら、なつかしい次郎の事を、さうして、早く日の目を見ようとして、動いてゐる胎児の事を、それからそれへと、とめどなく思ひつづけた。（略）／（略）彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくやうに、腹の児は又、人間の苦しみを嘗めに来ようとして、もがいてゐる。が、阿濃は、そんな事は考へない。唯、母になると云ふ喜びだけが、さうして、又、自分も母になれると云ふ喜びだけが、この凌霄花のにほひのやうに、さつきから彼女の心を一ぱいにしてゐるからである。≫（七、傍点引用者）

冒頭部の「しかしその間も」の具体的内容は、「内心女夜叉」（四）沙金の「蝎のやうに、人を刺す」（同）蠱惑性の虜となっている男達が、沙金の指揮に従い、藤判官家の襲撃を行っている状況のことである。この襲撃は、単なる金品強奪のためのものではなく、沙金を手中に入れようとする太郎、次郎、藤判官家の侍達が、争いを勝ち抜くためのものである。確執と不安と罪苦の交錯するこの世界の対極にあるものが、阿濃の「安らかな微笑」の世界に外ならない。対極的要素の第一は、「安らかな微笑を浮べながら」「遠くの月の出を眺めてゐる」阿濃の安息と野犬に追いつめられて「絶望の眼」（七）を空に向けながら、「兄を殺そうとした自分が、反つて犬に食はれて死ぬ」（同）のは「至極な天罰」（同）であると自責に苦しむ次郎の苦衷との対応である。第二は、「思入れ凌霄花のにほひを吸ひながら、なつかしい次郎の事」を思いつづける阿濃の充足感と沙金と

共に引きあげようとする時、「横あひから」「斬つてかゝる」（同）男に、曽て、立本寺の門前で見た「樺桜の直垂」（同）を認めながら、「沙金はこの男と腹を合せて、兄のみならず、自分をも殺さうとするのではあるまいか」（同）という疑惑を抱かねばならない次郎の不安との対応である。そして第三は、「耳をすますやうにして」（同）胎児の「身動きに気をつけ」ながら、「唯、母になる」「自分も母になれる」という「喜びだけ」で「心を一ぱいにしてゐる」阿濃の喜びと藤判官家の侍と内通して太郎殺害の機を狙う計画を沙金から打ち明けられている次郎が、藤判官家への襲撃時、「思ひもかけず射出した矢に、先胆を破られ」（同）ながら士気を鼓舞する平六の声に、心を痛める「一種の苛責」（同）との対応である。

阿濃の安息と充足感と喜びが、純一無垢な白痴に近い天性を支えに生き生きと具象化される時、確執と不安と罪苦の交錯する太郎と次郎との醜い角逐の世界の奥行きは鮮明に浮びあがり、そしてそれは、阿濃の無垢な魂を照射し、無限の相互照射を喚び起すのであるが、これは『行人』の挿話とは異質の形象特徴と言わなければならない。『行人』の漱石が、精神病の娘さんと盲目の女の二つの挿話を連鎖融合させ、諸人物の特性を無限に相対化しながら三種の愛を重層的に認識しているのに対し、『偸盗』の芥川は、阿濃の純一無垢な白痴に近い天性によって、沙金を取り巻く太郎、次郎、猪熊の爺の醜い確執の世界を鮮明に浮びあがらせており、ここに生じる静止的な相互照射には、無限の相対化作用は起りようもなく、両者独自の対照的な特徴が浮き彫りされていくのである。こうした相違が、副次的な挿話による作品の認識帰結にどのような特徴を齎しているか、次にこの問題に注目してみたい。

三　阿濃による『偸盗』の認識帰結と『行人』の挿話

精神病の娘さんが、二郎の想念に、最後連想的に思い浮んでくるのは、三沢の口から、一郎の講義中における変調を聞かされた時である。この時の二郎は、まず、「家を出た時に自分の胸に刻み込んだ兄との会見を思はず憶ひ出し」「其折の自分の疑ひが」「証明されたのではなかろうか」（帰ってから、三十）という心配に立ち至るのであるが、やがて、「非常に心細く且恐ろしく感じ」（同）る二郎は、一郎のことを「力めて」「忘れようと」（同、三十一）し、「不図」（同）精神病の娘さんを連想しはじめるのである。この連想には、当然、それを喚び起すだけの背景が用意されていなければならないが、漱石はそれを、「精神病」という共通的病状とその不幸の根本原因を思いやる家族の共通的心情を設定することによって果している。

精神病の娘さんを連想しはじめた二郎が、三沢に「あのお嬢さんの法事には間に合つたのかね」と尋ねる質問の答えは、精神病の娘さんの家族に対する非難へと発展していくが、それは、精神病の娘さんを不幸にした原因が総て三沢にあり、「離別になつた先の亭主は、丸で責任のないやうに思つてる」（同、三十一）「愚劣な親達」（同）への非難である。この非難を聞かされる時の二郎の想念に浮ぶものは、精神病の娘さん自身の姿ではなく、彼女の不幸の総ての原因を三沢のうちに見ようとする彼女の両親の姿であり、そして、「本音を吐かせて見たい」（同）と思いながら、直を「精神病に罹らして見」（同）ようと荒れ狂う一郎の姿である。この二郎の切迫感と不安感は、三沢を取り巻く世界と二郎を取り巻く世界とが重なり合うからに外ならない。

これに対し、『偸盗』の阿濃による認識帰結は、大きく事情を異にしていると言わなければならない。

《松明の火を前に立つた、平六のまわりを囲んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、臥すものは臥して、いづれも皆、首をのばしながら、別人のやうに、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、ぢつとしてゐない。（略）／（略）突然、猪熊の爺が、どこにそれ丈の力が残つてゐたかと思ふやうな声で、険しく一同の後から、声をかけた。／「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道。」／（略）／猪熊の爺は、濁つた眼を大きく見開いて、平六が身をかゞめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ぢつと見た。見てゐる中に、顔の色が、次第に蠟の如く青ざめて、皺だらけの眦に、涙が玉になりながらたまつて来る。と思ふと、ふるへる唇のほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今迄にない無邪気な表情が、何時か顔中の筋肉を柔げた。》（八、傍点引用者）

「命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊」は阿濃の産んだ赤ん坊である。「腹の児の親さへ知らない、阿呆な」（七）阿濃に意地悪い揶揄を重ねていた盗賊連中が、阿濃の胎内から生れたばかりの小さな命を前に、「別人のやうに、やさしい微笑」を浮べるところには、芥川の重い形象モチーフが働いていると見てよかろう。これは、「赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ぢつと見」つめながら、猪熊の爺の浮べる「涙」や「不思議な微笑」とともに、芥川が「darkness」の中に探り当てようとする「something」と深い関わりを持つものと考えられる。

腹の胎児の親さえ知らない白痴に近い天性、純粋一途な無償の母性的愛、そして、絶対的信頼と安息的充足感を持って生きる阿濃の哀しくも美しい愛の世界は、これまで、恐しい野性と異常な美しさを備えた沙金の蠱惑性に操られる男達の醜悪な確執の世界を、鮮明に照射する生の原型的役割を果してきたと言えるが、阿濃の産んだ小さな命を前に、「やさしい微笑」や「不思議な微笑」を浮べる盗賊連中の様子に注意する時、阿濃の認識的機能は大きく変化したと言わなければならない。つまり、沙金の蠱惑性に操られながら凄惨な確執を重ねる男達の醜悪な我執を、ただ照射するのみでなく、芥川の新たな生の展望方向を探る重要な認識機能を持たされたことになるのであり、この挿話的な阿濃の世界には、本話の世界よりも高次な救抜の未来が開かれているのである。これは、無限の相対化作用を喚び起す『行人』の挿話の世界とは異質の機能を備えたものであると言えよう。

問題は、「どうせみんな畜生だ」（五）という太郎の絶望的な人間認識を共通のものとして持ちながら、暗い悪徳の世界に沈む盗賊連中が、阿濃の世界からどのような救抜の力を獲得することができたかということである。とりわけ、猪熊の爺は、絶望的な暗い衝迫のままに、阿濃を手込めにまでしている人物である。その彼が、何故、阿濃の産んだばかりの嬰児の力によって、「不思議な微笑」を浮べることができたのか。己れの分身である子供の命を確認することのできた喜びによってのみ、これを説明することはできない。それは、他の盗賊連中の「微笑」を説明することが不可能になってくるからである。当然、この嬰児の力には、もっと別の或る力を想定しなければならないのであり、それは、「死」の認識の上にはじめて生き生きと感知し得る、命の生誕の崇高な輝きの力であり、純一無垢な魂の安らかな温もりの力ではなかろうか。

芥川が子供の無垢な魂に心を寄せながら、それを救済の力に仕立てた作品としては、『偸盗』の外に『戯作三昧』を挙げることができる。『戯作三昧』は、大正六年十月二十日より十一月四日まで、「大阪毎日新聞」に連載された作品である。『偸盗』の八章が、大正六年七月一日発行の「中央公論」に掲載された『続偸盗』の中の章であるので、孫、太郎の「御勉強なさい」「癇癪を起しちやいけません」「辛抱おしなさい」（十四）と語る言葉を契機に、『八犬伝』の執筆に打ち込むことのできるようになった馬琴の救済過程は、そのまま、『偸盗』末尾の盗賊連中の救済過程に直結しているものと見ても差支えあるまい。

ところで、この純一無垢な魂の力を支えとして、新たな生の展望を聞こうとする救済過程の形象には、芥川の「鋭い頭脳」によって博捜する書物の世界の大きな影響が考えられる。その第一がトルストイの『イワン・イリッチの死』の影響であり、第二が芥川の傾倒した国木田独歩の影響である。『イワン・イリッチの死』の影響は、次の対応場面を手掛りに明らかにすることができる。

《(一)この時、突然、猪熊の爺が、どこにそれ丈の力が残つてゐたかと思ふやうな声で、険しく一同の後から、声をかけた。／「その子を見せてくれ。よ。その子を。見せないか。やい、極道。」／（略）／(二)猪熊の爺は、寝た儘、徐に手をのべて、そつと赤ん坊の指に触れた。(三)と、赤ん坊は、針にでも刺されたやうに、怒ちいたいたしい泣き声を上げる。平六は、彼を叱らうとして、そうして又、やめた。老人の顔が――血の気を失つた、この酒肥りの老人の顔が、その時ばかりは、平生とちがつた、犯し難い厳さに、かゞやいてゐるやうな気がしたからである。（略）彼はまだ、口を開かない。唯、彼の顔には、秘密な喜びが、(四)折から吹き出した明け近い風のやうに、静に、心地よく、溢れて来る。彼は、この時、暗い夜の向うに、――人間の眼のとゞかない、遠くの空に、さびしく、冷かに明けて行く、不滅な、黎明を見たのである。／(五)「この子は、わしの子ぢや。」》（偸盗、八、傍線引用者）

《それは三日目の終りで、死ぬ二時間まえのことであった。ちょうどこのとき、小柄な中学生がそっと父の部屋へ忍び込んで、寝台のそばへ近よった。(一)瀕死の病人は絶えず自暴自棄に叫び続けながら、両手をふり回していた。(二)ふとその片腕が中学生の頭に当たった。(三)中学生はその手をつかまえて、自分の唇へもって

ゆくと、いきなりわっと泣きだした。／ちょうどその時、㊷イワン・イリッチは穴の中へ落ち込んで、一点の光明を認めた。そして、自分の生活は間違っていたものの、しかし、まだ取り返しはつく、という思想が啓示されたのである。

（略）㊸彼は眼を見開き、わが子のほうを見やった。彼は可哀そうになってきた。》

（イワン・イリッチの死、十二、傍線引用者）

傍線部㈠における猪熊の爺の「どこにそれ丈の力が残ってゐたかと思ふやうな」「険し」い声は、イワン・イリッチの「自暴自棄に叫び続け」る声に重なり合うものである。そして、傍線部㈡における猪熊の爺の手は、意識的、能動的に「赤ん坊の指」に触れており、これは、無意識的、自然的に「中学生の頭」に当るイワン・イリッチの手の状態とは異なるものであるが、この相違は、対極的対応を示しており、しかも、無垢な子供の手との接触が、共に、魂の再生を導く契機となっている。また、傍線部㈢における阿濃の赤ん坊の「いたいたしい泣き声」は、あざとい才知とは無縁な本能的衝迫によるものであるが、これは、純粋一途な愛の衝動によって張りあげる、イワン・イリッチの子息、ワーシャの泣き声と同質のものであり、しかも、猪熊の爺とイワン・イリッチは、共に、この泣き声を耳にしながら、新たな生の開示を予感しているのである。さらに、傍線部㈣における猪熊の爺は、「暗い夜の向う」に「不滅な、黎明」を見ているが、「暗い夜」はイワン・イリッチの落ち込んだ「穴の中」に対応し、そして、「不滅な黎明」は「一点の光明」に対応しているのである。こうした対応関係に留意する時、傍線部㈤における猪熊の爺が、阿濃の産んだ赤ん坊を「この子は、わしの子ぢや」と、はじめて認知する心情の基底には、「自分の生活は間違っていたものの、しかし、まだ取り返しはつく」というイワン・イリッチと同一の思いを読みとることができる。

自己の弱点を徹底的に攻めて行き、そして、重い責苦のもとで、すべての悪を善に変容していこうとするトルストイの偉大な精神を讃美している大正五年八月一日付の山本喜司宛書簡、あるいは、エゴイズムと生存苦を認識し、その認識自覚のもとで、「一切を神の仕業とすれば神の仕業は悪むべき嘲弄だ」という神への憤懣を吐露しながら、「周囲と自己とのすべての醜さ」を凝視しようと決意を固めている大正四年三月九日付の恒藤恭宛書簡、そして、これらの書簡内容と照応する『イワン・イリッチの死』の作品内容などを併せ考える時、イワン・イリッチの子供、ワーシャの無垢な魂は、芥川の精神の深部に、意外に大きな影響を与えていたものと考えられる。

イワン・イリッチの子供、ワーシャとともに、『偸盗』の認識帰結に影響を与えていると考えられるもう一人の人物は、農夫、ゲラーシムである。彼の純一素朴な魂は、『イワン・イリッチの死』の世界の醜悪なエゴイズムの諸相を鮮明に照らし出しており、阿濃の白痴に近い天性は、国木田独歩の『春の鳥』などの「白痴讃美」のロマンチシズムの影響をも受けながら、ゲラーシムの純一素朴な魂の極致を表したものとして捉えることができよう。片岡良一氏は「白痴讃美」の思想について、「[注15]人間内部に新しく神にかわる権威が打樹てられて（略）当然それが浪漫主義思潮としての最も根柢的なよりどころとなったのであり、ひいてまことかとか純粋さとか無邪気さとか自然さとかいうものを尊ぶのが、その思潮としての中枢的な特質となったのである。自然が、単なる天地山川という意味での自然を越えて、その奥に最も純粋にして永遠なるもの――すなわち新しい〈神〉に通ずるものを宿すものとして尊重されたり、同じような純粋さとか自然さとかいうものの最も純化された表現として、幼児とか赤ン坊とかいうものを極端に尊重するようになったりしているのは、すべてそこからきたものであったのである。それどころか、そういう傾向の事に激してもう一歩徹底したところには、白痴を愛してこれを讃美するというような思想さえ生れることになっているのである。（略）国木田独歩の『春の鳥』（明治三十七年）などに、そうして白痴を讃美する思想の片鱗を見ることができる。」と述べておられるが、『偸盗』における芥川は、この白痴讃美の浪漫性に、「愚なる教師とならんあら涼し」という漱石の俳句の持つ鋭利[注16]な批評精神を重ね合せながら、「something」の認識方向を探り当てるための重要な人物設定を図ったと言えるのではなかろうか。

むすび

○兄弟十女。始めは兄が弟を殺すかの如くかき女をころすに完る。……(1)

○兄と女との関係を depict する scene. 朱雀門（?）辺偸盗の集合する光景。

（女は覆面にて出で兄と弟はそのまま出る。）兄のそこへ赴くみちより書き出

す。……(2)

○発端。老人の盗賊。Dostoefskyの「虐げられし人々」の発端をみよ。……(3)

これは、『手帳』に記された劇要素と主な設定場面に関する構想メモである。(1)の構想は執筆段階において一層複雑化し、弟が兄を殺そうとする劇要素も加えられているが、(2)の構想は「朱雀門」が「羅生門」に置き換えられたのみで、総てが実作に生かされており、そして、(3)の発端部に登場させる人物構想も、「はじめて会う人を例外なく思わずぎょっとさせる」ような『虐げられし人々』の老人の無気味な特性が、猪熊の婆の人物特徴として、具体的に生かされている。当然、次の構想メモも、作品解明の重要な手掛りとなってくる。

○病人及弱者のEgoismを書かんとす。……(4)

○兄弟のenmity及その肉親のrelationのweakなる点。……(5)

○皆神の無を語る。婆来って否定。There is something in the darkness. ……(6)

○弟はsly――放免となりて兄をつかまへに来る。fraternal loveのexplosion……(7)

この構想メモには、『偸盗』の形象モチーフに深い関わりを持つ芥川の人間観を捉えることができる。(4)の病人のエゴイズムは作中に生かされることもなく終っているが、弱者のエゴイズムは、「痘瘡」(三)のために「隻眼つぶれた、生まれもつかない不具」(同)者、太郎の「疑り深い」(一)性格をはじめ、沙金の蠱惑的な媚態に魅了されて、兄、太郎の殺害を唆す沙金の奸計にはまる次郎の浅慮、あるいは、太郎の太刀打ちの危機に直面する猪熊の爺が、「親殺し」(五)の罪を説くことによってその危機を脱しようとする狡猾さなどの中に生き生きと具象化されている。この形象背景には、(5)の構想メモに見られる骨肉の愛への不信感が強く働いていたと考えられるが、これは、すでに見てきたように、芥川自身の実生活に深く根を下した人間観と言うことができる。

『偸盗』における形象上及び認識上の問題点は、弱者のエゴイズムを中核に据え、様々な確執の葛藤を重ねる「darkness」の世界に、人間のどのような深層部を照し出し、どのような命の再生を図ることができたかということである。つまり、(6)の「something」が何であり、それが構想メモ(7)の「fraternal loveのexplosion」を支える重要な力になり得ているかどうかということである。

『行人』の漱石とは異なり、主要人物の個性的特徴を外的、身体的要素を中心に定着させた『偸盗』の芥川は、政治的、社会的、歴史的諸要素の交錯する世界[注17]の構造性とかその枠の中に生きる人間の深層世界の照射を捨象し、そして、性の力に翻弄される情念と骨肉の愛に拘束される心情との葛藤の中に、新たな生の開示を求めようとしたと言えるが、それを果す中心的な認識機能は、むしろ、挿話的な阿濃の愛の物語の中に求めることができる。阿濃は、『行人』の精神病の娘さんと同様に、生の原型を表わすものであり、それは純粋一途な無償の愛に生きる母性的愛の原型である。芥川は、この母性的愛に生きる阿濃の安息と充足と喜びと愛の相剋に生きる太郎や次郎達の確執と不安と罪苦との間に生じる照射作用を生かしながら、相互の世界を鮮明に浮びあがらせているが、この本話と挿話との静止的な相互照射には、『行人』のように、諸人物の特性を無限に相対化しながら、重層的な認識視点を獲得していく可能性が開かれているとは言いがたい。そこで、性の情念と骨肉の情愛との葛藤を経た後、死の危機に瀕している次郎を救済していく太郎の魂の転生(fraternal loveのexplosion)、あるいは、日常裏切りつづけられながらも、死の危機の中で、夫、猪熊の爺のために自己犠牲を惜しまなかった猪熊の婆の魂の浄化などは、どこまでも、阿濃の無垢な魂とは関係もなく、瞬発的に生じたものである。これは丁度、激しい憎悪を感じる狡猾な猪熊の爺の老いの頸に、瞬時「不思議な憐憫」(五)の情を抱く太郎の心情と同質のものであり、この[注18]形象特徴は、作品内部の構造力学を超えて働く、芥川固有の「柔かい心臓」の作用によるものという外はない。この心臓作用の基底にあるものは、「神も僕にはだんだんとうすくなる」という絶望的状況を語りながらも、「家族の係累といふ錘」にどこまでも拘泥したり(明治四十四年頃、山本喜誉司宛書簡)、あるいは、「僕の信仰をより力づよくより大にするものは」「一は父母(もしくは其記憶)一は友人(同上)三は妻もしくは愛人(同上)」(大正五年八月一日、山本喜誉司宛書簡)と考えたりしているように、生の最も根底的な支えを身近な日常次元の人間関係の中に求めようとする精神土壌であると言えよう。

この[注19]「家族我」的精神土壌と死を眼前にした極限状況を基底に企図した認識方途とは異なり、阿濃の世界の触発によってはじめて達成される魂の再生は、阿濃

の出産した嬰児を前に、「別人のやうに、やさしい微笑」（八）を浮べる盗賊仲間と死期を前に「平生とはちがった、犯し難い厳しさ」（同）と「不思議な微笑」（同）を浮べる猪熊の爺の心に見出される。しかし、「苦しめる丈、殺生ぢや」（同）と猪熊の爺の死の苦悶を凝視する平六達には、やはり、死との対峙は無縁のものではなく、また、「この子は、わしの子ぢや」（同）と嬰児の手を求める猪熊の爺の心底には、やはり、「家族我」的精神土壌が安息の場として広がっている。

このように、『偸盗』の芥川は、『行人』の主要人物の特性と劇要素の骨格を導入し、また、死の危機状況を必要条件とし、そして、『イワン・イリッチの死』のゲラーシムとワーシャの無垢な魂を手掛りに、『羅生門』の闇の世界を克服していく一条の光を探り当てたと見ることができよう。しかし同時に、日本固有の精神風土に根を下ろす芥川の「柔かい心臓」は、「鋭い頭脳」の抑圧を潜り抜け、ほの見えた新たな自我の拠り所を、日本的家族我の中に解体させていく危機を招来していたと言えるのではなかろうか。

〈注〉

（1）三好行雄氏は「悪が悪の名において悪を許す」「倫理の終焉する場所」を読みとっておられる。（『芥川龍之介論』〈一九七六、九、筑摩書房、六四頁〉）

（2）駒尺喜美氏は「善と悪を同時に併存させ」る「矛盾体」としての「人間」提示を読みとっておられる。（『芥川龍之介の世界』〈一九七二、一一、法政大学出版局、二八頁〉）

（3）『「偸盗」への一視角』（「語文研究」31・32合併号、一九七一、一〇、〈日本文学研究資料叢書「芥川龍之介Ⅱ」所収、一九七七、九、有精堂、一二四頁〉）

（4）拙稿『「孤独地獄」小考 ― 漱石の影響 ― 』（「岡大国文論稿11号、一九八三、三、六六頁～六七頁）

（5）菊地弘氏は「血縁的気禀に対して情欲を対立物として絡め」る形象意図を読みとっておられる。（『芥川龍之介 ― 意識と方法 ― 』一九八二、一〇、明治書院、四五頁）

（6）拙稿『「行人」論 ― 「彼岸過迄」の破綻部より見た構想について ― 』（「評言と構想」16輯、一九七九、六、浅川書店、五五頁）参照。

（7）平岡敏夫氏は、この特徴描写に『草枕』（漱石）の「那美さんの顔を想起させるところがある」とされながら、「顔の不統一」には、漱石のような「文明批評」の視点とは無縁な特徴を指摘されている。（『芥川龍之介 ― 抒情の美学 ― 』〈一九八二、一一、大修館書店、一七七頁～一七八頁〉）

（8）（6）の論文、五二頁参照。

（9）三好行雄氏は、阿濃に「あらゆる悪をつつみこんで、それを〈悲しみ〉としてひきうける抱擁者＝〈母〉による救済のモチーフ」を読みとっておられる。（〈1〉の論文、一〇二頁）

（10）石割透氏は『偸盗』に「失恋体験より見ることを余儀なくされた〈醜い〉混沌たる現世」を「自己の内部で論理と倫理の世界に収斂して生きやすいものにしようとする」モチーフを読みとっておられる。（『芥川龍之介「偸盗」における意味』〈「日本近代文学」22集、一九七五、一〇、一三三頁〉）

（11）お婆との愛を語る猪熊の爺の「涙」も同様である。

（12）（6）の論文、五四頁参照。

（13）『文学 その内面と外界』（一九五九、一、弘文堂、二七六頁）

（14）（6）の論文、五八頁参照。

（15）『日本浪漫主義文学研究』（「片岡良一著作集」6巻所収、一九七九、一〇、中央公論社、一九二頁～一九四頁）

（16）（15）の論文、一九四頁。

（17）石割透氏は、『偸盗』の世界は「人間に潜む悪や罪の問題が追求された世界」などではなく、「もっと限定された愛欲地獄という暗い世界」であるとされている。（〈11〉の論文、一二六頁）

（18）東郷克美氏は「たしかに母性愛、夫婦愛、兄弟愛、親子愛など救いの契機となるさまざまな『魂の力』が書かれてはいるのだが、いずれもとっ

てつけたように作為的で不自然な印象を否めない」とされている。（『「猿のやうな」人間の行方』〈「一冊の講座　芥川龍之介」所収、一九八二、七、有精堂、五五頁〉）

(19) 南博氏は「日本人の場合、集団我は最も典型的なかたちで、家族集団のなかで深い心理関係に結ばれる成員たちが共通に分けもつ、家族我を生み出す」と論じておられる。（『日本的自我』〈一九八三、九、岩波書店、二六頁〉）

昭和六十一年三月三十一日受理